

「お客さんはディーブです。」—甲浦のち熊本の旅

瀬田康司

1.

熊本へは午後の便なので、甲浦行（高知県の東端の小さな町）の時のような朝のラッシュ&直接的間接的事故という、既知並びに未知との遭遇の心配をさほどすることなく自宅を出、羽田空港に向かう車中（自動車ではないよ、電車だよ）の人となった。南千住駅に停車したとたん、車内に緊急事態を示すずぶとくしかし脳天にがっしり響く警告ブザーが鳴り響き始めた。どうやらぼくの乗っている車両の前方が音の発信源らしい。

ぼくの前で、冷房で冷やされてたまらなくなっただのかむき出し腹をゴシゴシと擦っていた、ここがもし☆☆であるなら売春婦と見間違えられるであろう赤いピンヒールを履いた黒ホットパンツ女が、腹ゴシゴシの手動かしを止め、身体を90度下にさらに45度右にくねらせて前方をうかがっている時間が10分ほど過ぎた。動き出したとき車掌がなにやら喋っていたがこちらには聞き取れない無意味なアナウンスであった。腹出し赤ピン短パン女はなおも身体を90度下&45度右に反らせて人垣の隙間から前方を見たままである。そんなに気になるんなら見に行ったら？と心で思って、顔で馬鹿にした。と同時に、そんな観察で溜飲を下げている自身を蔑んだ。

・・・あ、こういう社会風刺が目的じゃなかったんだっけ。またもや、旅の出鼻をくじかれるようなアクシデントに見舞われたその腹いせいで、一文を始めてしまったわけである。

その日、宿に着くまで甲浦行のような心内的アクシデントはまったくなく、つまらない半日であった。宿は、ネット検索で最初にヒットしたKKRホテル熊本である。驚いた。

その1. 国家公務員共済施設であったこと。

その2. 熊本城天守閣を全景見上げるロケーションであること。

その3. 一泊朝食付き7500円がものすごく安い！得した！の感があること。

その4. 宿内のレストランは和風、中華とあり、いずれも豪華！高い！であること。外出を嫌うぼくは、夕食は、中華でどんぶりものを食べた。黒のチャイニーズドレスを身にまとったきれいなオナーチャンに勧められたメニューは数千円単位でランク付けされたコースモノであったのだが、断固拒否し、飯モノ一品メニューを寄こせと強要した次第。オ

ネーチャンの目は哀れみと蔑みになっていた。再現してみましようか？会話・・・。

「いらっしやいませ、お一人ですか？」

「ご覧のと通りの独り者です。」

「こちら、メニューでございます。」

・・・・パラ、直ちに、ボタン。

「一人でコースを食べても面白くもないし、おいしくもないでしょうねえ。」

・・・・にっこり（哀れみ）

「とにかく腹に詰め込みたいので。一品のどんぶりモノのメニューを。」

「それでしたら、そのメニューの最後のほうに書いてございます。」

・・・・パラ、パラ、パラ、ボタン。

「エビ、ホタテ入り野菜あんかけご飯。要は中華丼ね。」

「私どものところは本格四川料理をお出したしております。」

・・・・内言「だったら、四川方言でオシャベリなさいな。」

・・・・内言「町の食堂と一緒にしないでね、薄汚い爺。」

・・・・両者、機を一にして、意味のないニッコリで、しばし呼吸を整える。

「以上注文は終わりです。」

「お飲み物のメニューはこちらでございます。」

「温かいお茶。メニューにはないでしょうけど。」

・・・・内言「食わないで出ようかな。気にいらね、この店。」

・・・・内言「注文取り消して出るのなら今よ、クソ爺。」

・・・・ぼく、横を見る。ガラスの向こうは熊本城の天守閣。ああ！いすわります。

「かしこまりました。」

出てきた「中華丼」。やや深めの四角い皿にエビ、ホタテ入り野菜あんかけがこんもりと形作っている。アレー、オラ、どんぶり頼んだがや・・・・。レンジで、こそっと、あんかけの野菜の裾をめくりあげた。幼いころのスカートめくりを瞬時思い出した。スカートめくりは「罪を犯す」感覚、野菜の裾めくりは「罪を犯された」感覚。

・・・・あった、あった、ご飯があった、よかった、よかった。

最初塩辛く感じ、注文をしくじったと反省した。しかし、次第に塩味になじんでいったのか、美味という言葉を出してもいいな、と思うようになった。そして、そのころにはも

う、飯粒と野菜破片とが皿の底に沈んで、レンゲでは掬い取れなくなっていた。町の食堂なら間違いなく皿を持ち上げ傾けて、レンゲでかき集め口に放り込むのだが、チャイナードレスのオネーチャンたちが、怪しげな目で交互に僕のほうに視線を投げ、お話しをなさっておられましたーきっと蔑み会話でしょうなあー故、「もったいない」は「みっともない」行動として評価されるであろうと考え、レンゲをテーブルに戻したのである。ガラにもない行動であり、後々まで自らの貧相さを呪い続けた。

お会計、2千円。豪華なツインの部屋に戻り、明日の行動のための資金を財布に確かめ、シングルの夜を切なく送ったのである。

2.

意味なく朝6時起床。意味なく朝シャン、意味なく髭剃り。以上、いつもにない行動はこの朝の時間つぶし。7時になったので朝食会場に行く。日本料理店で和食バイキング。いつもながら、仲間同士ワーワーガヤガヤ言いながらお好み取り放題みっともないシーハー食事光景に耐えられないのだが、食べないわけにはいかない。ほんの数日前の、甲浦再興したばかりのホテルでの伝統のお膳朝食、侘しきおかずの品を心で愛でながら、一人静かにいただく食事を心から懐かしく思う。

とにかくエネルギー源を詰め込む。あのハラヘッタ……の再現はもういやだ。

チェックアウトをしたものの、所用まで2時間余はある。さて、どうしたものか。とりあえず手荷物のいくつかをロッカーに収納して、ぶらぶら町を歩こうか。「あんたがたどこさ、肥後さ、肥後どこさ、熊本さ、熊本どこさ、船場さ……」に出てくるタヌキにお目にかかれれば幸せだなあ。肝心のロッカーがどこにあるのか、とにかく「都心」に出るしかないだろう、ぎらつく太陽のもとを歩き回るには、体力消耗が続いているこのところ、無理な行動である、タクシーで所用近くの JR ステーションまで行こう。

「北熊本駅をお願いします。」乗り込んで運転手に行き先を告げた。次の言葉を添えて。「熊本大学教育学部附属中学校に所用があつて出かけるのですが、そこに行くのに手荷物をいくつも持っては失礼だと思って、駅のロッカーに預けたいのです。」

「北熊本という駅はあるにはありますがねえ、JR じゃないし、附属中学校には遠すぎますよ。上熊本じゃないでしょうか。」

「ああ、そうだ、上熊本駅だ。そこへお願いしますね。」

「ロッカーあつたかな。けっこう不便ですよ。」

「学校からいただいたご案内では上熊本駅が最寄り駅だということなのです。……じゃあ、

熊本駅ならロッカーありますよね。」

「ございます。熊本駅になさいますか。少々不便になるとは思いますけれど。」

運転手の最後の言葉に、ロッカーに荷を預けるという気持ちがぐらつき始め、あろうことか、次の言葉が口から出た。そして心は言葉の後についていった。

「運転手さん、このまま1時間ほど市内を回ってくださいな。ただし、ごらんのような年寄りですから、車からは降りません。」

運転手とぼくの車内会話が始まる。熊本は高校の修学旅行で一泊したという記憶がある、約半世紀前のこと。熊本城が今のようにあったかどうか、記憶は定かではない。「お客さんが修学旅行でいらしたところに再建されましたので、あったかなかったか、ぎりぎりのところでございますね。今年は築城400年になります。」それから、細川家の話になったり、加藤清正の話になったり、運転手は、あれこれ、ぼくの興味関心となるところを探って、ハンドルをどう回すかを考えていたようだ。

シーン1.

「運転手さん、船場山ってあるの？」

「歌では船場山となっておりますが、少し丘になっている地帯ですね。昔は山里だったわけで、タヌキもいたということですね。」

「そのタヌキが、現在の船場地区のあっちこちに、いるんですって？」

「ほら、右手の文房具屋さんの前に大きな白いタヌキが。」

「これは地元タヌキじゃないでしょう。通い帳ととっくり持ってますもの、この文具屋さん、新参者ですねえ。」

「橋の手前に銅製の親子タヌキが立っております。欄干にもおります。」

「こちらは生粋地元タヌキだ。」

「橋の向こう端の欄干にはエビもおります。」

「川エビでしょうね？」

「歌の二番に歌われておりますよ。たぬきがエビに変わり、猟師が漁師に変わります。」

「一番だけしか知らなかったな。」

シーン2.

「とくながなおふみ・・・ひ？」(ぼく)

「……………」(運転手、ぼくの言葉に強い関心を寄せている様子)

「あ、とくながすなおぶんがくひ なんだ。草で 学 の字が読めなかった。」

「もう少し行ったところに徳永直の文学碑がございます。ご案内しますか？」

細川家菩提寺にも夏目漱石にも小泉八雲にも車中会話には応じるものの下車して史跡見学をする様子を見せないぼくに、「ご案内しますか？」と訊ねてきたのには驚いた。まさに、ぼくは、車を降り碑文を読みたいと思っていたからだ。顕彰碑は三叉路の樹木が生い茂り草生したところで陽の当たるのを避けているように建っていた。立田山登り口だとの案内をいただいた。彼の作品「太陽のない街」の舞台はぼくの青年期を過ごした街。ぼくが社会の矛盾に強く関心を寄せるようになった文学と街。切なく甘酸っぱいものが胸の奥からこみ上げてきた。

碑文は「私たちはもっと労働について語らなければならない。労働のもつ内容は、現在語られている多くの恋愛よりも、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、ないしは消費生活の絢爛さよりも、はるかに豊富で、人類を益するものである」とあった。作品「最初の記憶」より。

シーン3

「左手の老人ホームは、もとはハンセン病病院で回春病院跡です。」

車はそのまま過ぎ去った。ぼくの頭の中でハンセン病、ハンセン氏病、らい病という言葉が交錯した。

「運転手さん、すみません、老人ホームに戻っていただけますか？」

タクシーは老人ホームの門をくぐり、裏手に回って駐車した。そこに建っていたのは「リデル・ライト両女史記念館」であった。キリスト教宣教のために日本にやって来たリデルの目に映ったのはハンセン病罹病患者たちの悲惨な姿だった……。

S先生の研究のお手伝いをしたときに幾度となく耳にすることができたわが国ハンセン病患者の置かれた非人間的な環境と施策。それに敢然と立ち向かった外国人女性たち。ぼくは記念館に入り、展示史料にしばし見入ったのである。

運転手さんから聞かされた感動的な話し。「私は、小学校の先生から、ハンセン病は通常のコミュニケーションでうつるものではない、と聞かされ、また差別するものではないと、ハンセン病にかかった子どものお母さんをよく教室に招いていました。40年も前のことです。」「我が政府がハンセン病患者に対するさまざまな隔離政策が間違っていたと公的に表

明したのはつい先年のこと。その先生、すばらしいですねえ。感動しました。いいお話ありがとうございます。」

シーン4

結局、荷物は交通センターのロッカーに収納するのがいいだろうという運転手の助言に遵うことにした。

交通センターに着いて、ロッカーの所在を教わり、料金を支払った。その際、「久しぶりにディープなお客さんをご案内できて、とてもうれしく思いました。ありがとうございます。」と運転手が言う。

「ディープとは？」

「たいていのお客さんは、お城をご案内し、水前寺公園をご案内し、あとは酒色の場所をご案内して、一日が終わり、ですから。」

「ガイドブックの類を一切見ない人間、感覚だけで歩く人間ゆえ。変わり者です。同行を希望なさる方はまずいません。またのときは、運転手さんに、ぜひご案内をお願いしたいと思います。」

ロッカーに荷物を預け、とことことことこ、熊本城址縦断し、目指す付属中学校へと歩いた。炎天下ではあったが、約40分、かつての城下の街の趣などをほんの少し味わうことができたのである。

あんたがたどこさ♪ どこいぐさ♪ まちいぐさ♪ ……でたらめに替え歌をしながら。足は軽やかに進んでいった。